

平成六年
(1994)
四月十五日発行
〔年四回発行〕



第十五号

猫 養 通 信

発行人 東 明 雅
発行所 柏市つくしが丘 2-2-12 東 明 雅 方
Tel. 0471-75-1192

夢想開きの連句

東 明 雅

今年は菅公ご生誕千五十年にあたり、また、亀戸天神では四年に一度のご鳳蓋渡御祭にもあたるめでたい年だとのことである。それで毎年行なっている藤祭り奉納正式俳諧も、一つ趣向を加え夢想開きの俳諧とすることにした。

夢想開きとは、夢に連歌や俳諧の想を得ること、夢の中に神仏が現われて暗示される場合が多い。その夢想の句を発句として臨起りの連句を作るのを「夢想開きの連句」というのである。

夢想の連歌には特別な法式があつたが、俳諧(連句)はそれに準ずる。まず、発句の署名は「御」とし、脇は事主で、一卷清浄に、巻中に、夢枕・偽・左遷などの語を忌む。また、第三まで霞・雪・霜・露・電等のもろくはかないもの、及びらん留めを嫌うとされている。その外、「俳諧大辞典」によれば、「もし、夢想の句が下の句であつた場合は、面八句を九句とし、百韻は百一句、五十韻は五十一句、歌仙は三十七句にし、夢想の句が季のない雑の句であれば、雑の句を付け、第三から季を入れる。床飾りに、聖廟すなわち連歌の神である天神の御影か、歌神丸の像かを掲げ、景物に、松・竹・梅・鶯・子規・花・雪などを詠み入れるのは、聖廟に奉納する志を示したのであり、他の神の瑞夢による時は、その神々の趣にふさわしく詠むことを心得とした」と書いてある。出典が分からないので、全面的に従ってよいか否か、疑問な箇所もないではないが、たとえば、床飾りなどは、例年われわれがやっている通りであり、さらに取り入れる景物は、もともと百韻の場合を想定しているのであるから、二十韻では全く無理で、これらはその精神を汲めばよいであらう。

作品の例としても新しいものは乏しいので、寛永十三年(一六三六)の熱田万句から表八句を掲出する。

夢想之講諧

御神事は竜の胸にて乗渡り
御 民もろともよろこひそする
御 めでたくもにきはふ花の春は来て
吉次 かつむ座敷になをる一門
善太 長閑にもほる銭瓶の福ひらき
与平次 親かうくは月もうれしき
権右 いものこは露のまにくさかへ出
久太 あひるほとむ秋のさかもり
八右

貞門時代の古い作品ゆえ、現代連句の考にはならぬだろうが、この作品を見ても霞とか露とかの言葉も平気で使っているし、あまり拘泥していないことが知られる。

『亀戸天満宮資料集』を拝見している時、正保(一六四四)一六四七のころ、太宰府天満別当大島居菅原信岡孫信祐の夢中に、かふたちてさかふる梅の若枝哉

と管神が告げられた由が出ていた。このご夢想の句を頂戴して、夢想開きの連句を奉納したいと思う。

甚と句との交わり

河野 玄鷹

囲碁と連句とを一緒に楽しむ会を作った第四回目の集いを今年に京都で開きます。名付けて「互徳会」——甚と句会、会員は現在四名です。新聞の記事に惹かれて、私が日本郵便甚

愛好会に入ったのは、六年前の昭和六十三年秋でした。郵便甚とはお互いにハガキで一手ずつ打っていくのですから、一局終わるのに早くて百手、長引けば三百手近く、一年から三年がかり、まったく気の長いことです。しかし始めてみるととても楽しく、現在会員が約八百人あります。

郵便甚を始めて間もなく、その相手の吉柳秀人さんの冗句に付き合っているうちにうまく誘いこまれ、連句を巻く羽目になりました。庇を貸して母屋を取られ、ハガキの四分の三は文音、所要時間も連句に大半を費やすありさまです。

仲間を誘いこんで、今五人の甚友と文音しています。一局(同時に数局進行)終わる間に、歌仙で四巻以上首尾します。また両吟と同時に三吟等も巻いているので、ハガキは小さな字がときには表までいっぱいです。なお今、高槻市の富沢弘さんが「連句入門」を郵便甚会報に連載中です。少しずつながら反響があるようです。

連句を始めたときの私の一番の悩みは、連句人口過疎の地方にいるため直接連句の座に出る機会がなく、先生方のお捌きにあうことが出来ないことでした。しかしまったくの初心者の方が突然さし上げた手紙に諸先生方が皆暖かい親切なご返信を下さったのが忘れられません。おかげで連句から離れられなくなりました。

特に、村野夏生様よりご紹介頂いた松山の鈴木春山洞先生には大変お世話になっています。初めて私が連句の座に参加したのは、国民文化祭愛媛の第一回連句大会でした。その後当地にまでおいでくださり、小郡連句会を開いてくださいました。また、土屋笑郎様、次いで式田和子様に文音ご指導頂き、さらに東明雅宗匠のご講評を頂くことが出来たのも、春山洞先生のご紹介のおかげでした。この原稿を佛淵様から依頼されることになってしまったのも、そんな不思議なご縁からでした。

☆ 明雅先生卒寿の賀連句会 ☆

三月十三日、江東区深川芭蕉記念館において、東明雅先生の八十の賀のお祝いと連句会が執り行われました。猫養関係者のみで九十四名の方々が各地より参加され盛会でした。この日は又、明雅先生の『芦丈翁俳諧聞書』も上梓され、会員にとっても更に気持ちを新しく連句に取り組む節目となりました。

式の中で、伊那より見えた芦丈先生のお孫さんの根津美紗さんに、明雅先生よりご本の贈呈がありました。ご師弟の強いえにしに胸の熱くなるものを覚えました。付け合の要諦を「蓮の糸のように」と教わりますが、連句人にも目に見えぬ不思議な出合いの糸があるのを感じます。

いつも新しい境地を目指される明雅先生的情熱とアイデア、先を見通された布石について、ご祝辞の中でもふれられておりましたが、さらにお元気でご指導頂きたく願っております。

十四卓に分かれての歌仙興行は、各席、「御衣黄」「細川句」「鬱金」「楊貴妃」など桜の名前を割当てられ、幹事の方々の行き届いた進行で楽しく華いなお祝いの会となりました。(記・佛淵)

花梨

権頭 和弥

日本の十一月初旬、ジンバブエは、雨期を前にした初夏の候で、ブラワヨの街にはジャカラランダの薄紫の花が咲き残っていた。花が咲き、散り、葉が茂るといったジャカラランダは、桜花に似通っている風情で、満開時は、街を埋め尽くすばかりであるという。もちろん、徹夜で花見席の分捕りなど無いそう。

郊外のブッシュを貫く道には、少しの風に赤土が舞い、からからに乾期が仕上がっていた。が、樹林から奥に進むと、やがて涼気と湿った肌ざわりの世界に入ったことを思い知らされる。見渡すザンベジ川の、今、将に、切って落されたといわんばかりの幅一七〇〇メートル余、落差一二〇メートルの世界最大級の滝の一つであるビクトリアフォールズに出くわしたからである。遠くからは、水音と水煙しかわからない。「音のする煙」と呼ばれている場所だけに、壮大な滝を見下ろす道には、水煙が水滴となつて飛散し、さながら、日照雨か、時雨に見舞われているような塩梅である。

ザンベジの上流の空は、ザンビアの国境に続き、奥深い広大な南部アフリカの紺青の天空へと連なっていく。十五年前に独立したばかりの若い国であるが、十三世紀に栄えた王朝の面影が、自然の様相、人の気配に感じられ、レトロ気分不思議な瞬間を味わわせてくれる。

人口の大半は、シヨナ族とンデベレ族の人達で、人なつこい運転手のジウリーさんはシヨナ族の部族宗教を信奉し、伝統民族舞踊を踊り、また狩猟踊りの太鼓を叩く。彼は、得意な笑みを満面にたたえるので、

「よし、ならば、ひとつ、秩父音頭の一節でも」と、食事の折に、手の所作を交え、唸ってみた。すると、ジウリーさん、

「オーケーグー」と、上半身一ぱいの喜びようで、教えろとばかり立ち上がったのには驚いた。秩父音頭が、シヨナ族ジウリーさんに受けてしまった。

「ここでは、札を欠くから後で、後で」とうまく難を逃れた。踊りと唄の好きな彼はその後、バスの中で、時々「ハーエー、ハーエー」などと声を発し、ご機嫌であった。

スリムな体付き、まっ白な歯と白い指爪の大きな手が、鮮明に思い出される。

シヨナ族の踊りの主テーマは、狩猟と農耕の材をシンボライズし、日本の代々神楽の天狐の座や、田祭りの神部達の剽気所作に似通っている。高く跳び、地に伏し、スライディングし、横這う、といった敏捷な動きのリズムを織り成して、人間の「祈り」の在り様を語ってくれる。

* * *

冬に出て機おり鳥の巢を借らん

水煙に現れては移る虹の梁

喉渴き野牛も乾きジンバブエ

足裏とは神に結ばる夜の踊

フラミンゴ僧のごと夏の暁

半ズボンほたはた過る石畳

カフェテラス硬貨に手慣れサングラス

スプリングラー遙か駝鳥の黒点に

ケーブルの己が影追ひ山は夏

バスコダガマミョディアスの碑青き踏む

* * *

猫はお好きですか

山口 美恵

ところで「ねこみ」の猫はお好きですか？ 大好き私の友人は「猫好きの人はきつとずるい人に違いない」と言います。まあ単純な、と呆れてしまいましたが、人間そんな偏見の一つや二つ抱えているのではないのでしょうか。私など、いろいろ、あの名古屋のお菓子が大好きで、「いろいろうが好きな人はきつと悪人に違いない」と思い込んでいます。

「それでは好物は？」と聞かれて、子供の頃からわさび漬、塩辛、なまこの酢のもの、辛子明太子：と上げて行くと、きまつて「きつとお酒呑みなね」という返事が返って来ます。実は私の酒量はビールなら300ml(コップに)、日本酒なら猪口に二杯が限度、といったところなのです。

さて、連句というものに初めて出会った十年ほど前のことです。「きつと、とても意地悪に違いない」という私の偏見の対象になったのがお揃きさんです。なにしろ私の自信作は、たいていお揃きの一瞥を受けて、そのまま私の脳に横たわったまま。出しても出しても「季戻りですね」「人情が欲しい」「丈比べ：」というわけで死屍累々。ふと座を見渡すと、すてきな花の句をさらりと出して、「これは冷やに限るね」とコップ酒を口にされる明雅先生、今まで見たことも聞いたこともない雅やかな句を出される正江さん、酒脱な恋の句がつつぎと出てくる徒司さん：、この余裕とかが

良さにはほとほと参ってしまいました。それ以来、私は「あの先生たちは、きつと打出の句槌を持っていらっしやるに違いない」と思うことになっています。そうでなければ自分が可哀相ですから：、

S 猫養会員作品集 S

『猫養作品集Ⅳ』が出来上がりしました。どうぞお買い求めください。(¥1800)

〒二七七 柏市加賀2-12-11

担当 梅田 利子

TEL 0471-7218119

* II号、III号、残部あります。

『芦丈翁俳諧閑書』を読んで

副島 久美子

平成六年三月十三日、東明雅先生の傘寿のお祝の席で思いもかけず内祝にと御著書『芦丈翁俳諧閑書』を頂戴しました。

当日、会場の大広間は溢れんばかりの出席者で、猫養会のこれほどの隆盛を地下に眠る芦丈先生もさぞやお喜びのことと、今更ながら東先生の連句復興に傾ける情熱とお仕事振りに深く感銘を覚えたことでした。さて読後の感想文をとの御注文、私なりに感じた事を思い付くままに述べさせていただきます。

今日私達が連句を巻く時、自他場の関係は厳しく、あくまでも打越さない様に気を配ります。歌仙「雪」の巻の芦丈先生自解のところや、「芭蕉の心法」についてのくだりを読むと、自他場の取り扱いが相当緩やかで、これならば付句を考える場合随分楽なのにと考えたりしましたが、連句は先へ先へと玉が転んで進行することが肝要なので、芭蕉や芦丈先生の境地に到るべく高い理想を掲げ、式目をしっかり踏まえた上で、より自由な発想も取り入れ、色々な試みをしてみる事が変化のある一巻を得る道であらうと思いました。

それにしても自他場についてのお二人の問答は、かつてA・C・Cの連句教室で連句のれの字も知らない私達に手取り足取り自他場の関係など噛んで含める様に、時には順番に名指され、当てられた私はどきどきしながらお答えしたことなど懐かしく思い出されます。

「恋離れは、まるきり人情なしの風景に、くいと移ってしまうはずい。すんなりとその匂いが何ものかあるようにね」と芦丈先生がおっしゃいますが、あれと思った私

の方が間違いでしょうか。確かに以前の私でしたらそうだったのですが、この頃は余情などほとんどない時事の句を付けたりしてさっぱりと恋の座を通過している事が多くなってしまうました。数多くの作品に係わってれば、同じパターンでは飽足らず自然に変化を求めていたのでしょう。これからは又初心に帰ってすんなり余情の句も心がけていきたいと思えます。

冬の日「狂句こがらし」の巻はかつて十一年以上前カルチャー教室で東先生から一句一句解釈と鑑賞の講義をお受けしてとても楽しく興味尽きなかった事を思い出します。芦丈先生の註解評釈はまことに自由奔放でこれ又興味しんしん、脳から第三への転じ方について「そんな笠そっちの方ですんでる」という処では思わず噴き出しそうになりました。確かに脳のを第三につなげて解釈してはいけないということでしょう。

表五句目の地名朝鮮は、さすがにかぶせた言葉として考えるところとらえ方など、まるでお二人の対話の中に私も入ってしまった様な気持で、挙句まで一気に読み通してしまいました。それにしてもこの御本、東先生を通して芦丈先生までお会いしたことがある様な身近な親しさを感じつつ面白く読み終えることが出来ました。

『芦丈翁俳諧閑書』 東明雅 著

定価 二〇〇〇円

◎芦丈先生と明雅先生が脳で教えて下さるような気のする御本です。是非座右に一冊お置きください。ご注文は前金で、送料とケース代で四百円(切手可)を添え、左記までお願い申し上げます。

〒一六七 東京都杉並区桃井2-14-5

式田 和子宛

父の謡

橋本 妙

北海道の春はおそかった。四歳か五歳だった私がふとめざめると、広い座敷には私ひとりであわていた。金色の陽光が部屋いっぱいにはし込んでいた。枕元には、黄色いタンポポが腕一かかえほどもおいてあった。また、初めて見る十センチほどの市松人形がうす紫のちりめんの振袖を着て立っている。

家中みんな、女中子守まで母につれられ風邪をひいた私を残して花見に行ったのだ。別に悲しいでもなく、何となく静けさにひたっていると、突然遠い座敷から父の謡曲がきこえて来た。

「羽衣」だろう、うらうらとしたひびきにききいっていると、私は「ものあわれ」ということをからだいっぱい感じた。生まれて来たことのかなしさが、無抵抗な子供心のすみからすみまでひたした。以来七十年以上生きていくのに、只その時その瞬間のショック(感じ)で生きていく。あの金色の座敷で目ざめた一瞬に、私は一生の全部を生きたのだ。

(* 橋本さんはいつもカットを描いてくださっている方で、編集部)



◆ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

二口 橋 文子
一万 うらら会

(敬称略)

◆ 発展基金随時受けつけております。よろしくお願ひします。

* 猫養同人会の郵便振替口座が平成六年五月より変更になります。新口座は、振替口座001301550348 猫養同人会

* 連句とさかな *

シラウオとシロウオ

杉江 杉幸

「月もおぼろに白魚の……」は黙阿弥の「三人吉三」の台詞で、かがり火の中四手綱で掬ったのがシラウオ。

美味しい食べ方はさつと茹で上げ、ふきのとうとの酢味噌がけ。シラウオの淡い甘さとふきのとうのほろ苦さがえも言われない。

とある春の宵、吉祥寺の「舞来里」に赴くと、貼札に「いさざのおどりぐい」とある。博多は室見川名物のシロウオを山陰の宍道湖では地方名ではイサザと呼ぶとのこと。早速注文すると大鉢の中にイサザが透明な細身に眼だけ黒く静かに顔を揃えている。うづらの卵に、三杯酢の小鉢に金網の杓子で掬って入るとびよんびよんとはね廻る。すこし残酷だが一気に喉元を通した。春の麗夜の一酌である。

【Q】連句は転じがなければならぬと教わりますが、実際の付け合いの中で、転じているいないの判断は主観的な面もあるように思えます。どのような点に工夫すればよく転じられるかお教えください。

(村田 富美)

【A】「歌仙は三十六歩、一步も後に帰る心なし」(三冊子)と芭蕉がさとしたように、連句(俳諧)では、一卷を通して、後に戻らず進展するのが基本ですが、具体的に言うと、まず、付句が打越に戻らぬよう心がけねばなりません。打越に戻るのを「観音開き」と言って、最も嫌います。従ってこの三句(打越・前句・付句)の転じに注意することが肝要であります。

この三句の転じの方法は、昔からいろいろと考えられて来ましたが、蕉門の立花北枝が三年間工夫考案して芭蕉にも見せたという「付方自他伝」の法が、一番分かりやすいと思います。

即ち、人情の句を自の句・他の句とに分け、人情なしの句は場の句として、1自場他、2他場自、3場自自・場自他、4場他他・場他自、5自自他、6自他他、7他他自、8他他^{シラシラ}自、9自他半場他と九つの組み合わせに収めて付けて行く方法で、これによれば、自然に打越の難を避けることができます、三句の転じが果せるのです。しかしながら、その一句が自か他か、あるいは人情の句か場の句かの判断も難しい場合があり、あるいは一句の中に自と他を含んでいる自他半もあるから、初心の方にはちょっと面倒かも知れません。

- 1 硯に向かひすだれ揚げつ、 自
- 2 梨の花咲き揃うたる夕小雨 場

3 雉におどろく女一むれ 他

3' 雉におどろく絵描き一人 他

右の場合、3は全く転じ得ているが、もし、3'を付けたならば、同じ他の句であっても、打越の1の人物と同じ人物、あるいは同系統の人物を想像させる為、三句の転じにはなりません。

同じように、たとえば

1 鯨突一二の銚をあらそひて 他

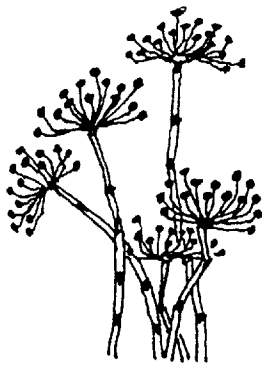
2 無分別なる貝に雪降る 他^{シラシラ}

3 あのやうな小庵かなと思ふまで 自

3' 辛口をもう小半と思ふまで 自

これも3は全く別の人物(出家、旅の僧)となつて1から転じ得ているが、3'は同じ自の句でも1と同じ漁師めいた人物である故に転じていないのです。このように、ただ自他をふりわけただけでなく、その内容にもよく注意しないと転じない場合がありますので御注意下さい。

転じているいないの判断に主観的な面もあると言われるのは、自・他・場の判定、さらにその内容の表現と理解の適否によるものであろうと存じます。



知切 馬骨

杉内 徒司

「東明雅氏中壽祝賀」記念に上梓された『芦丈翁俳諧聞書』に知切馬骨の名を見出し、ある時期、春は泊江の馬骨邸で土筆飯を供され、歌仙を巻いた事を思い出し懐かしかった。

最初に伺った折、「新橋演舞場で馬骨さんの『勳皇僧 宇都宮黙霖』を見ましたが、あれは何年でしたか」
「昭和十六年だったよ。あれを見てくれたのか」
「と言って大事にされ、帰りに記念だと言って頂いた白い都忘れは、その後転々とした私に贈りてきて熱海の庭に今も咲いている。」

その頃馬骨は天狗に関する研究書を何冊も出していたから、天狗の話をして山向ったが、御本人に天狗の付句がなく、聞かされた方が天狗を沢山句材にした。私も、「陸奥の天狗大方鬚ありて」とつくった。

(牛耳擲「龍文様」47・11・5『摩天楼』)
野村牛耳没後、郷土の鳥取県国府町に文学碑の建立や、遺稿集『泉は放射線に流れる』の出版の事などで、昭和五十年八月頃馬骨邸を訪ねる事が多かったので、誘われて『伊藤葦天追悼會』(同九月二一日)に出席して皆吉爽雨、神保朋世画伯に紹介され、馬骨の交遊の一面を見知った事もある。

戦後の昭和二十六年頃、世田谷在住の作家、海音寺潮五郎、野村愛正、知切光歳、小山寛二、中沢孚夫が矢立会という会をつくり、戦後の大変化した世相に乗り遅れない小説の勉強をしていた。
この会で、国学院出の海音寺が言い出し

て連句実作を始め、野村愛正が主に捌きをつとめて巻いた歌仙が約二十巻残っている。馬骨は久保田万太郎門という事を知ったのは馬骨の没後だが、そう言えば、『草上の虹』(昭和四十年十二月刊)に収録されている「梅寒し」の巻の馬骨の発句、
梅寒し父が喪主なる木星忌

の木星は、久保田万太郎の子息と伺った事も思い出した。馬骨本名光歳。広島県呉市出身、明治三十五年十月十三日生。昭和五十七年八月五日没。

編集部より

○今年は桜の咲くのが遅く、咲いたと思ったら花見気分を味わう前に散ってました。早かったり遅かったりは桜にも都合があるからですが、人間の勝手に騒がれるのは迷惑かも。

○久しぶりに訪ねる京都は渡月橋の辺、何となく軽井沢の雰囲気に似てきたような気がしました。傘着て寝ている嵐山がふて寝にも見えたりして……

○剽逸にして滋味あふれる『芦丈翁俳諧聞書』を読んでいて、連句の中で変って行くもの、変らないものに、思いをはせました。○忙しい時期にご執筆お願いした方々にはまことに有難うございました。

季刊「ねこみの」通信 第十五号
発行者 猫養連句会
印刷所 アトリエ・Newo